



大正時代の外ノ浦湊の風景。丸物と呼ばれる甕や壺が満載された船。沖に停泊する大型の北前船へは舢舨が使われた（写真：浜田市浜田郷土資料館）



廻船問屋・楯ヶ瀬家に残る北前船の御客帳や船検帳。すり鉢の取引の記載が随所にみられる



現在の外ノ浦港は漁港となっている

つい先頃まですり鉢をつくっていた西山家には、外ノ浦の湊に向かって12室の大型登り窯があり、湊には作業場と荷造りされたすり鉢が今も残る



## 石見焼積出港

### 浜田市 外ノ浦湊

亀谷窯業さんの脇を下ると外ノ浦の湊に出る。昔は人力あるいは牛馬によって瓦は湊に運ばれた。当時、重い瓦を遠方へ一度に運ぶには、船でしかなかった。そのための地の利である。

この外ノ浦の湊は浜田藩が財源を得る最大の湊であり、揚荷は米、塩、砂糖など、積荷は麻、和紙、鉄、そして焼物であった。

また、北前船の風待ち潮待ち湊として、廻船問屋や廓が軒を連ねた。また、亀谷さんのような瓦屋をはじめ、湊からの丘陵部に登り窯をつくり、湊そばに仕事場と製品の出荷場を設ける西山家（写真）など窯業関係者も多く、外ノ浦湊は一大産業地帯であった。

廻船問屋の末裔、楯ヶ瀬孝さんによれば、北前船には原則不文律として、一隻一隻がそれぞれに決まった廻船問屋と商いをする仕組みであったという。

その楯ヶ瀬家に残る台帳には、江戸から明治、大正を通じて全国から多数の北前船が入ったことが記されている。

大店とはいえ一軒でこの船数であるから、問屋の数を考えると、夥しい数の船が出入りをし、当然、主力商品の一つであった、石見焼を大量に積込んだことが容易に想像される。